

## 高木兼寛の生涯

東京慈恵会医科大学（慈恵医大）の歴史を考えると、創設者・高木兼寛の思想の影響がきわめて大きいことに気がつく。むしろ兼寛の思想が形を成したものとみることができる。

### 生 い 立 ち

慈恵医大の創設者・高木兼寛は嘉永2年（1849）9月15日、日向国諸県郡穆佐村白土坂（宮崎県東諸県郡高岡町穆佐）に生まれた。家は代々薩摩藩士であったが、武士といってもごく下級の武士で、平生は大工で生計を立てていた。13歳のおり、医学を志し、鹿児島に出て蘭方医・石神良策の門にはいった。

その頃、日本は明治維新を目前に大きく揺れ動いていた。ペリーの率いる黒船が人々を恐怖におとし入れ、さらに生麦事件、薩英戦争はいっそう薩摩藩を危機にさらしていた。

兼寛は慶応4年（1868）6月、薩摩藩の若い軍医として戊辰の役に加わり、東北征討軍とともに会津若松の戦場におもむいた。

しかし、この戦役に参加した兼寛は医師として激しい衝撃を受けた。同行した薩摩藩の軍医はほとんどが漢方医であったため、治療が拙劣であり、それに比して蘭方医の多い他藩の軍医は豊かな医学知識と技術をもって治療に当たっていた。ある日、兼寛が野戦病院で傷病兵の手術を行っていたとき、それを見ていた他藩の軍医から大声で「薩摩藩には医者は一人もおらぬらしい」と言って笑われた。兼寛は恥ずかしさのあまり顔を赤らめ、返す言葉もなく立ちすくんでいたという。

彼はその頃から西洋医学を早く修めねばならぬと切におもうようになった。幸い、薩摩藩でも、この戊辰の役の経験に懲りて、明治2年（1869）に

藩立の鹿児島医学校を設立して西洋医学の教育を始めた。兼寛はただちにこの医学校に入学した。

幸いなことに、この医学校の校長として英医・ウィリス（W. Willis）が赴任してきた。ウィリスは、戊辰の役で戦傷者の治療に大きく活躍し、その功績によって一度は医学校兼大病院（東大医学部の前身）の院長に就任したものの（このことは英国医学がこれからの日本の医学になることを示唆していたのであったが）、維新政府は、患者中心の英国医学より研究中心のドイツ医学を将来の日本医学の範に採用したため、失職したのであった。

兼寛の将来は、このウィリスを師に得たことによってはっきりと決定づけられた。ウィリスは、ここで西洋医学の徹底的な実地教育を行い、兼寛は彼の助手を兼ねながら、寸暇を惜しんでよく勉強した。ウィリスは、兼寛の非凡な才能のみならず、男らしい性格を愛した。そして英国留学をしばしばすすめるようになった。

しかし兼寛には実際に留学の手がかりをつかめる筈はなく、それより海軍に入ればひょっとしたら留学するチャンスはあるかも知れないということになった。幸い、旧師の石神良策が海軍軍医部の最高責任者になっていたので、その助力を得て上京し、明治5年（1872）4月から軍医として出仕することになった。

上京して二ヶ月目、兼寛は蘭英学者・瀬脇寿人の長女・富と結婚した。媒酌はもちろん石神であった。

兼寛は上京以来、毎日、高輪の海軍病院で多くの患者を診ていた。そして直ぐに脚気患者がきわめて多く、またその多くが死亡することに気が付いた。しかもこの病気にたいする治療法がまったく無いのに失望した。兼寛は患者を前にして自分の無力を嘆くばかりであった。このことが、兼寛に留学をさらに急がせることになった。

その頃、海軍病院内に軍医学校が新設された（明治6年8月）。そして英国からアンダーソン（E.W. Anderson）が軍医ならびに医学生の教師として招かれた。アンダーソンの講義は兼寛をはじめ実吉安純、豊住秀堅らが通訳して行われた。明治13年にアンダーソンは任期満了で帰国するが、そのと

きの卒業生は 15 名であった。後に兼寛に協力する軍医たちである。

## 英 国 留 学

海軍病院、軍医学校でも兼寛の学才と熱意はアンダーソンの賞賛的であった。アンダーソンは、兼寛の留学先を自分の母校であるセント・トーマス病院医学校にきめ、紹介、推薦した。

こうして兼寛は、ロンドンのセント・トーマス病院医学校に留学することに決まり、明治 8 年 6 月 13 日、横浜を出航した。アメリカ経由であったため、7 月 16 日にはもうロンドンに着いた。この旅行中に兼寛は、かつてウィリスに薦められた解剖学原書を 4 回も読んだという。

兼寛はこうして、今度はセント・トーマス病院医学校の学生として、かねてから熱望していた西洋医学（英国医学）を学ぶことになった。ここでの医学教育は想像以上に充実したもので、とくに病院での臨床（ベッドサイド）教育は徹底したものであった。これは英国の歴史によるもので、英国ではまず患者のための収容所（から発展した病院）があり、そしてそこで働く医者を育てることが何よりも重要だったのである。教育の内容が実際的な患者中心の医学になるのは当然であった（実際、この医学校はセント・トーマス病院に付属するかたちであった）。その点、ドイツにおいてフンボルト（A. Humboldt）の強力な指導のもとにつくられた研究センターの大学において、その付属病院の患者が研究対象にみられるのはまた当然であった。

セント・トーマスで学んだ教科のなかで、兼寛にはサイモン（J. Simon）の疫学とパークス（E.A. Parkes）の衛生学がとくに興味深かった。前者は疾病の問題を社会の集団要因、環境要因から追究するものであり、後者は人間の健康を保つために必要な各栄養素の量とバランスを研究するものであった。これらの知識は帰国後の脚気の研究に大いに役立った。

ただ当時の英国は、サイモンやパークスのみならず、一般に予防医学的、健康医学的色彩が強く、兼寛はそのような影響も大きく受けた。たとえばジェンナー（E. Jenner）の種痘による天然痘の予防や、リンド（J. Lind）の果汁

による壊血病の予防や、さらにスノウ（J. Snow）の給水法の改良によるコレラの予防などは、その成果は英国ではすでに市民のものになっていた。

兼寛は5年後このセント・トーマス病院医学校を卒業したが（明治13年（1880）5月）、成績は抜群で、この5年間に13の優秀賞、名誉賞を受賞した。なかでもチェセルデン銀賞（Cheselden Medal）はこの医学校を最優秀の成績で卒業したことを示す最も名誉ある賞であった。

セント・トーマス病院には、クリミア戦争の傷病者看護で有名なナイチンゲール（F. Nightingale）が創設したナイチンゲール看護学校や彼女が設計したナイチンゲール病棟があった。英国全土から集められた“ナイチンゲール基金”によるものであった。兼寛の留学時、すでに彼女は55歳であり、もう病床にあったが、その患者中心の医療思想は兼寛に大きい影響をあたえた。

兼寛が留学していた頃のロンドンでは、産業革命いらい貧富の差が大きくなっており、これを緩和するため、王室はセント・トーマス病院に貧しい病人を受け入れる窓口をもうけさせ、無料で治療させるようにしていた。もちろん財源は王室基金であった。また一般的にも、富んだ人々は相互扶助の精神から病院に慈善的に寄付、献金をし、病気に苦しむ人々を助けるのは当然のことと考えていた。兼寛はこのような英国の医学を支える社会的背景まで自分のものにして帰国した。



高木兼寛が学んだセント・トーマス病院医学校全景（1875年）

## 慈善病院の開設

兼寛が留学を終えて帰国したのは明治 13 年 11 月であった。海軍医務局に復帰し、海軍病院長に就任した。彼にはこれからぜひ成し遂げたい仕事があった。一つは英国で学んだ患者中心の、セント・トーマスのような、病院と医学校をつくることであり、もう一つは留学前から頭を占めていた脚気病の研究であった。

その頃の日本の医療状況は、英国の状況を見てきた兼寛にはひどく貧しくみえた。東大では明治 4 年からドイツ人医師を招いて医学教育をはじめたが、そこには患者を研究対象とみるような思想があり、一般庶民には遠い存在であった。また数少ない大病院の医師も、そのドイツ医学の影響のためか、患者を下にみる権威主義的傾向が強く、一般庶民にはこれまた遠い存在であった。一般庶民にもっとも近いはずの開業医がまた、そのほとんどが漢方医であったため、治療法が秘伝、秘薬に類する非科学的なものが多く、あまり頼りになる存在ではなかった。

兼寛は、このような状態の日本では、とにかく科学的医学を基礎にしなから、しかも人間味のある、患者中心の英国医学を早急に日本全体に広げねばならないと考えた。

まず何から事をはこぶべきかを考えていたとき、松山棟庵と言う医学者が彼を訪ねてきた。松山は、蘭方医学を学んだのち、しばらく英国、米国の軍医らの助手として梅毒の検査や治療、さらに種痘の実施などに協力していたが、明治 6 年からは、福沢諭吉の慶応義塾の医学所の校長に就任していた。松山は慶応義塾で英語を学んでいた関係で福沢に校長として招かれたのである。

福沢諭吉は、維新政府で、日本の医学の範として英国医学、ドイツ医学いずれを採るべきかで激しい議論があったとき、英国医学を採るべきであると強く主張したことがあったが、そうしたこともあって、英語につうじ英米系医学を身につけている松山を校長に迎えたのであった。

松山を兼寛に引き合わせたのは、海軍医務局長・軍医総監の戸塚文海であったといわれる。戸塚もかねてから松山の患者中心の医療思想に共鳴していたのである。

しかし、その慶応義塾医学所も、兼寛が帰国した年（明治13年）に閉鎖されてしまった。原因は、病院をはじめとする教育施設の不足と英米系医学教員の不足であった。この苦い経験を生かして、こんどは兼寛に協力して、もう一度挑戦してみたいと思ったのである。松山は兼寛の考えにまったく同感であり、病人の治療と直接結びつく医学を重視し、それにこたえる医師を養成すべきであるという点において意見は完全に一致した。

二人は想を練り、まず実行の主体になる医学団体「成医会」を結成した（明治14年1月）。会長に高木兼寛を、幹事に松山棟庵、隈川宗悦ら4人を選んだ。会員ははじめ36名であったが、まもなく100名に増加した。会員の多くは兼寛を中心とする海軍軍医団と松山を中心とする英米系医師団からの入会者であった。

兼寛ら成医会員は、明治14年の初頭から慈善病院の設立のために会合を重ねていたが、いろいろ事情があつて翌15年7月からひとまず天光院という寺院で小さいながら病院を開いた。そして16年9月からは、芝愛宕下（現慈恵医大の敷地）の廃院になった東京府立病院の建物、施設を譲り受けて、本格的な診療を開始した。これが民間における日本最初の慈善病院、有志共立東京病院のスタートであった。

有志共立東京病院（Tokyo Charity Hospital）は、その名の示すとおり有志（医師、実業家）の醵金で設立され、運営される病院であり、兼寛の「貧にして病み、病んで療するあたわざる者を救うは、健康富裕の人、社会に尽くすの一義務たるを信ずるなり」がその趣旨であった。実際の診療は、兼寛、松山棟庵、隈川宗悦ら成医会幹部の4,5名がこれにあたった。

医師や実業家でスタートした醵金活動は、まもなく華族や政治家の夫人からなる「婦人慈善会」が替わり、病院の経済的援助をすることになった。この活動の一環が鹿鳴館での慈善バザー（明治17年（1884））であった。2度にわたる慈善バザーでの収益は15,000円になり、この寄付を受けた病院は



婦人慈善会による鹿鳴館慈善バザーの図（明治17年）

「看護婦教育所」（慈恵看護専門学校の前身）の建築費に充当した。近代看護教育を目指す、日本最初の看護学校である。

患者数も増え、経費もこれに比例して増大してきたので、これを婦人慈善会で背負うのは次第に無理になってきた。もっと大きな財源が必要になってきたのである。兼寛は、皇后陛下にこの病院の総裁になっていただき、皇后御みずからこの慈善事業に参加していただけないかと考えるにいたった。これは兼寛が英国で学んだ、英国王室と慈善病院の関係であった。

兼寛のこの願望は現実となり、これを機に有志共立東京病院は東京慈恵医院と改称し、皇后の保護のもとに、兼寛の夢も大きく前進した（明治20年4月）。皇后からのご下賜金によってつぎつぎと建物が新築、増築されていった。

その一つがナイチンゲール病棟を手本にした新病棟の建設であった。構造はワンルーム形式で、病棟全体がいつでも見通せるのが特徴であった。左右一列に並んだベッド間の広い空間にはナースステーションがあり、また入口のところには婦長の居住室が置かれていた。患者と看護婦がお互いの存在を





皇后陛下慈恵医院行啓の図（明治 20 年）

いつでも確認できる位置にあり、患者の精神はいつも安静に保たれる。ここには構造的にも、機能的にも「徹底した患者中心の病室」をつくろうとしたナイチンゲールの精神が忠実に生かされていた。

兼寛はまた、明治 30 年（1897）ころから、病院に神棚と仏壇を設けさせ、だれでも参拝できるようにした。そして毎日のように芝増上寺から僧侶を招いて説教を依頼していた。彼は、患者にとって、身体の治療ばかりでなく、心のケアも不可欠であることを実感していたのである。この行事は多くの患者から感謝され、礼状を届ける者も少なくなかったといわれる。

東京慈恵医院は、こうして皇后よりのご下賜金によって運営はかなり楽になったものの、患者は増加する一方であり、やはり時間がたつにつれてふたたび困難になってきた。そのため、病院はふたたび改組して、こんどは三井、三菱などの財閥が参加する社団法人をつくり、これが病院の運営にあたることになった。すなわち社団法人・東京慈恵会の誕生である（明治 40 年 7 月）。



この改組の構想が生まれたのは、兼寛がその前年におとずれた欧米視察のさい、ロックフェラーなどの財閥が医療施設にいかに大きい貢献をしているかを知ったからであった。

このとき病院名も東京慈恵会医院と改められた。ただ東京慈恵会の「目的」の項に「貧困にして医業を得る資力なき病者に施療す」とあるように、慈善病院創設の思想は何ら変わることなく受け継がれた。そしてこの改革を弾みにして病院はいっそう拡大、発展していった。

## 医学校の設立

兼寛は、病院開設の構想とほぼ同時に、医学校設立の準備もしていた。明治14年4月の成医会例会において、彼ははやくも医学校の設立の考えを提出している。兼寛が医学校で育てたかった医師は、当時の全国を風靡していた権威主義や研究至上主義とは無縁な、患者の痛みがわかる、人間味のある医師であった。他の医学校が、医学の学理を教え、医療技術を指導しさえすれば、もうそれで教育目的は十分達成されたと考えていたのにたいして、兼寛はその上にさらに“医の心”まで育てようとしたのである。

幸い、失敗したとはいえ、一度は慶応義塾医学所の校長までつとめた松山棟庵がこの計画に加わったので、彼の苦い経験はすべて生かされることになった。失敗の原因は、(病院をふくめて)医療施設の不足であり、教員の不足であり、そのもととは資金不足であった。

明治14年5月、成医会講習所(Sei-I-Kwai Medical School)という医学校が、京橋区檜屋町の東京医学会社の大広間を借りて誕生した(東京医学会社とは松山の関係する医学研究クラブであった)。教員は兼寛、松山らのベテランのほかにも多くの若い海軍軍医が加わっていた。彼らのはかつて海軍軍医学校で英医アンダーソンの教育をうけた新進気鋭の軍医たちであった。講習所での教育はきわめて厳格であり、はじめ100人ほどいた生徒も、教育が進むにしたがって少しずつ減り、1年後には20名ばかりに減ってしまったといわれる。

成医会講習所は、明治15年11月から、海軍医務局学舎(芝山内天神橋)

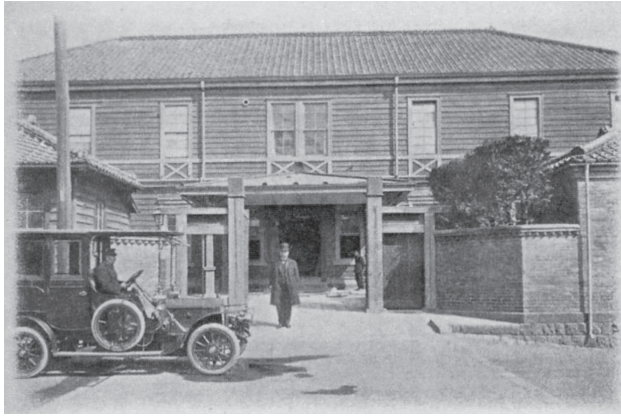
に引っ越すことになった。これは兼寛が、アンダーソンの帰国いらい中断していた軍医学校を医務局学舎として再開し、みずから校長に就任したためであった。医務局学舎に引っ越してからは、講習所の生徒と医務局学舎の生徒と一緒に教育を受けることになった。臨床実習はもちろん両校一緒に有志共立東京病院を使っておこなわれた。

ところで講習所の教員の給料は、特別な取り決めがなく、教員のほとんどは海軍の教官であり、それぞれの本務で給料をもらっていたので、講習所としては弁当代を支払うぐらいで勘弁してもらっていたらしい。はやいはなし、講習所は医務局学舎に共生することによって成り立っていたのである。

しかし、このような官立の医学校のなかに私立の医学校が同居する姿はいかにもおかしいし、また講習所としても従来練ってきた構想がすでにできていたので、芝愛宕町の有志共立東京病院（当時は東京慈恵医院に改称）の敷地内に引っ越すことにした（明治23年1月）。東京慈恵医院は、すでに皇后のご支援によってその運営が軌道にのっていたので、講習所はこの病院の付属医学校というかたちでここに移転したのである。校名も東京慈恵医院医学校（Tokyo Charity Hospital Medical School）と改められた。これで兼寛が、かつて英国で学び、医学校の理想と考えていたセント・トーマス病院医学校と同じかたちになったのである。慈恵医院医学校は、当時改築中であった海軍病院の古建材をもらい受け、それをもとに校舎を建築した。医務局学舎に同居すること実に8年であった。

この医学校は幸い、明治36年に東京慈恵医院医学専門学校に昇格することになった。それまでと違って、医術開業試験を受けることなく、卒業しただけで医師になれることになったのである。兼寛はこの機会に、彼の理想とするいくつかの教育改革を試みることにした。その一つは、入学試験に品性試験（口頭試問）なるものを加えることであった。

品性試験とは、いうならば人から（倫理的な性格）をしらべる試験のことであるが、（時間の都合もあり）兼寛が実際に試問したのは、「君は将来どんな医者になりたいのか」とか、「宗教を信じているか」といった質問であった。そして、はっきり自分の医師像を言えない者や、宗教に無関心な粗野な人間



明治 23 年に建てられた慈恵医院医学校。正面に立つのは高木兼寛校長

は、遠慮なく落としたといわれる。おそらく、受験生の心に、厳しい現実には流されないだけの強い倫理観があるかどうかをみたかったのであろうし、また彼が英国で学んだように、倫理の根本は宗教であると信じていたから、その根本のところを受験生に問うてみたかったのであろう。

教育改革のもう一つは、医学生に明徳会なる精神修養の講座を開いたことであつた。毎月一回、宗教家や文化人を招いて講義をしてもらい、それを拝聴するのである。講義のテーマは宗教関係から倫理、道徳、世界情勢までかなり広範であつたが、その目的とするところは学生の品性（人がら）を高尚にするためであり、しかもその品性の根本は弱者にたいする愛であることが強調された。

この医学校は、その後おおくの人間性ゆたかな医師を輩出していった。そして世間から「本郷の学理、芝の臨床」と評され、慈恵の患者中心の医学が東大の研究中心の医学に対置されてきたのであるが、このことは慈恵出身の医師がいかに病者の身になって診療してきたかをしめす証左であつた。明徳会は昭和のはじめ頃まで 30 年以上もつづけられた。

明徳会は同時に、一聴聞者としての兼寛じしんの宗教的境地も深めていっ

た。晩年のかれの日常は、まさに神仏にたいする感謝の生活であったといわれる。学生や若い医師が、タバコの吸殻や鼻紙を道路や床に捨てるのを見つけると、「それは君のために尽くしてくれた物ではないか、捨てるべきところへ捨ててこそ、報恩感謝の気持ちを表す道である」とじゅんじゅんと諭したといわれる。ここには人にたいする慈しみのみならず、役立ってくれたものすべてに感謝している姿がある。晩年の彼は、「悉有仏性」（万物ことごとく仏性あり）の境地にあったのであろうか。

## 脚 気 の 研 究

脚気は日本や東南アジアに多発する病気で、米を主食とする国に多くみられた。日本でも白米を多く食べるようになってから急激に増加した。とくに若い兵士や学生に罹る者が多く、兼寛が英国に留学したのも、その理由の一つは、脚気を予防、治療したいためであった。

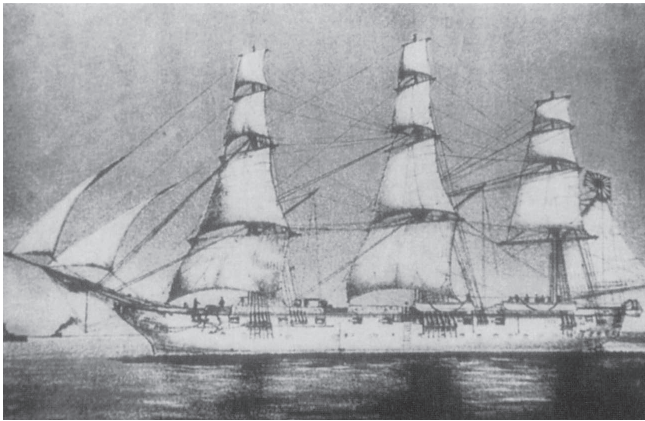
留学から帰国したとき、日本では脚気の原因についていくつかの学説が出されていた。もっとも重要視されたのは東大・陸軍が主張した“脚気は細菌によってうつる伝染病である”という説（伝染病説）であった。しかしどの学説も実際に予防や治療に役立つものはなかった。

兼寛は、実際に脚気の予防、治療に役立つ学説を発見すべく、ごく基本的なことから研究をはじめた。まず脚気の原因となりうる要因（気温、衣類、部署、食物、生計など）と脚気の罹患率との関係をしらべた。そして脚気の原因が兵士の摂る食物の質に関係があることに気がついた。遠洋航海で外国の港に停泊中は（洋食を摂るためか）脚気患者が減り、航行をはじめると（米食にもどるためか）ふたたび患者が増えるのである。

その頃、海軍で起きた龍驤艦事件でも同じことが言えた。練習艦「龍驤艦」が、ニュージーランド、ペルー、ハワイをめぐる太平洋 15 万キロの遠洋航海で、乗員 376 名中 169 名が重症脚気にかかり、25 名もの死亡者を出したのであるが、この場合もハワイで食糧を全部入れ替えてからは、一人の患者も出さなかったのである。

兼寛は、従来の兵食（米食）は炭水化物に比して蛋白質が少なすぎる欠点があり、洋食（パン食）ないし麦食のように蛋白質を多くして炭水化物を少なくすれば、脚気は予防、治療できるのではないかと考えた。彼はこのような兵食改善の必要を証明するために、龍驤艦に続いて遠洋航海に出る筑波艦をつかって、栄養試験をおこなう計画をたてた。筑波艦の乗組員に、彼が献立した改善食（主に洋食）を摂らせ、しかも龍驤艦と同じ航路をたどらせて、脚気患者がまったく出ないことを証明しようと考えたのである。

しかし筑波艦の栄養試験にたどり着くまでには大変な苦労があった。多くの高官を動かし、明治天皇にまで脚気問題解決の急務を奏上しなければならなかった。天皇への奏上ではこのように申し上げている。「今やわが国の兵士はその多くが脚気病にかかり死亡いたします。そのため、どういたしましてもこの病気を予防することを計らねばなりません。この病気の原因を研究いたし、これを予防することができますれば、日本国民および医学に携わる者の名誉でございます。わが国にかくも多数発生する病気の原因が外国の学者によって発見されるようでは、日本の学者の不名誉でございます。是が非でもこれをはやく究めねばなりません。……脚気の原因は、高木の研究によりますれば、栄養の調合が悪いためであります。従来の白米を主とする兵



高木兼寛の栄養欠陥説を実証した筑波艦

食のように、炭水化物が多く、蛋白質が少なすぎるためであります。……これを早急に改善せねばなりません。陛下のご英断をもちまして、何卒これをお改め遊ばされますように願わしゅうございます。……」と。

このようにして遂に筑波艦での栄養試験が可能になったのであるが、しかし筑波艦が出航してみると（明治 17 年（1884）2 月）、兼寛には少しずつ不安な気持ちがわいてくるのも事実であった。ひょっとしたら筑波の栄養試験は失敗するかも知れない、失敗したら多くの兵士を殺すことになる、そして天皇に偽りを申し上げたことになる。

不安な気持ちでいた兼寛に、ようやく嬉しい電報が届いたのは 7 ヶ月後の 9 月であった。それは「ビョウシャーニンモナシ アンシンアレ」（病者一人もなし安心あれ）であった。脚気患者は一人も出なかったのである。彼は全身全霊で神に感謝した。従来の兵食（米食）で同じ航路をたどった先の龍驤艦からの電文は「ビョウシャオオシ コウカイデキヌ カネオクレ」（病者多し航海出来ぬ金送れ）であったから、両艦での違いは明白であった。こうして脚気の原因が栄養の欠陥にあるという兼寛の学説（栄養欠陥説）ははっきりと実証されたのである。

兼寛の説得で全海軍の兵食が、明治 17 年に洋食（パン食）に、さらに翌 18 年からは麦食に続けて改善された。予想されたとおり、この改善による脚気の予防効果は素晴らしいものであった。それまで毎年兵員の 3 割、4 割が脚気に苦しんでいたのに、この時期から急激に減少し、明治 20 年からは一人の患者も出なくなったのである。

脚気の原因としてビタミンが米糠の中に発見されたのは大正元年（1912）であるから、兼寛の研究は、その 30 年も前に、脚気の原因が食物にあることを証明していたのである。その意味で、コレラ菌が発見されるはるか前に、その原因が飲み水にあることを証明していたスノウ（J. Snow）の研究に擬せられることがある（今からみると、兼寛が改善食に選んだ大麦、小麦は蛋白質と一緒にビタミンを多く含み、反対に白米は蛋白質と一緒にビタミンを米糠として捨てていたのである）。

このような優れた成果をあげていたにもかかわらず、兼寛の栄養欠陥説に



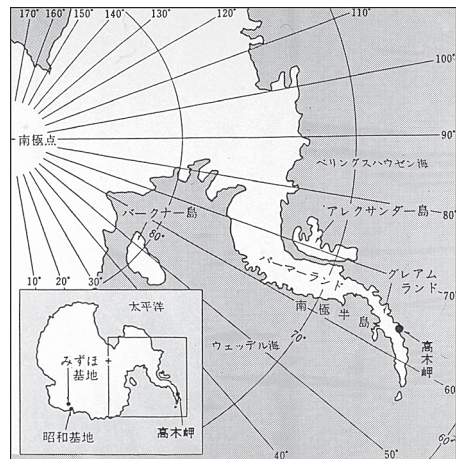
対する医学界の反応は冷たいものであった。とくに伝染病説を堅持する東大・陸軍グループの批判は執拗かつ苛烈をきわめた。兼寛に研究発表の機会さえ与えないことがあったのである。

しかし、その勝敗の判定は意外なところから下された。それは日清、日露の両戦争であった。麦食をまもっていた海軍からは脚気患者をまったく出さなかったのに、従来の米食を摂っていた陸軍からは夥しい数の患者をだしたのである。日清戦争では4万1千余の脚気患者と4千余の同病死者を、日露戦争では25万余の脚気患者と2万7千余の同病死者を出したのである。

日露戦争勝利の翌明治39年(1906)、兼寛は母校セント・トーマス病院医学校に招かれ、特別講演をおこなった。演題はもちろん日本軍隊の脚気問題であった。兼寛は3日間にわたって、研究経過を事細かに話した。著名な国際雑誌ランセットが、その全文を掲載したため、欧米の医学者、栄養学者には大きい衝撃をあたえた。そしてその発想の独自性と実証性にきわめて高い評価が与えられたのである。

南極大陸にビタミン学に貢献した功労者数名の名前が地名になっている。高木岬(Takaki Promontory)、エイクマン岬(Eijkman Point)、フンク氷河(Funk Glacier)、ホプキンス氷河(Hopkins Glacier)、マッカラム峰(McCollum Peak)などである。英国の南極地名委員会が命名したのである。

後年、若い軍医が兼寛に「もしあの栄養試験の筑波艦内に脚気患者が発生したら、その時はどうなさるつもりだったのですか」と問うたところ、彼は言下に「その時は切腹して詫びるつもりであった」と答えたという。筑波艦の栄養試験は命がけの行



南極大陸の高木岬(右下)



動だったのである。

## 晩 年

年号も明治から大正に代わり、兼寛も 64 歳になっていた。彼はそれまでの功績によって数々の荣誉職、荣誉賞をうけていた（海軍軍医総監、医学博士、男爵、勲一等瑞宝章などである）。そしてこれからは、以前からの希望であった衛生思想普及のために全国を講演行脚するつもりであった。

ところが、大正 8 年（1919）、古希を過ぎたばかりの兼寛に思いがけない不幸が襲いかかった。1 月早々、とつぜん三男、舜三の死がしらされた。舜三は三井の商社マンとしてニューヨークに滞在していたが、当時の経済界の混乱のためノイローゼになり、その治療中の交通事故であった。まだ 36 歳の若さであった。その悲しみが癒えない 4 月に入って、今度は次男、兼二（慈恵医学専門学校内科教授）が腸チフスに感染し、懸命の治療の甲斐もなく、穿孔性腹膜炎を併発して、たった 2 週間の療養で息をひきとった。まだ 38 歳であった。

おもえば息子たちは兼寛独自の教育法の優等生であった。「嘘をつくな」「正直であれ」「神仏を敬え」といった厳しいしつけ教育にも素直であったし、また小学、中学時代には勉強よりもむしろスポーツ、旅行などで体力、精神力を鍛えるべきだという信念で、心身ともにたくましくもなった。また自分の職業になる本当の勉強は、日本よりも外国（欧米）でやった方が能率がよいということ、中学を卒業すると直ぐに外国に留学させられた。外国で勉強すれば同時に語学も勉強でき、しかも広い教養も身につくから、一挙両得だという如何にも兼寛らしい考えであった。息子らは皆この兼寛の特異なカリキュラムを立派に卒業した秀才たちであった。

舜三は米国ペンシルベニア大学商学部を卒業したのち、米国にのこり、三井のニューヨーク支店に勤務していた。英語がきわめて堪能であり、15 年にもなる米国生活を十分楽しんでいるはずであった。兼二の場合は、兼寛と同じセント・トーマス病院医学校を卒業し、さらにドイツと米国で研鑽した

のち、若くして慈恵医学専門学校の教授に就任してまだ8年目であった。

二人の息子をほぼ同時に失った兼寛夫婦はただ呆然とするばかりであった。考えてみると、長女、幸子はすでに兼寛が留学中に死亡し（5歳）、四男、藤四郎は幼時に病死し（2歳）、さらに4年前には樋口繁次に嫁ぎ一児（樋口一成）をもうけた次女、寛子が世を去り（30歳）、今また次男、三男を失ったのである。四男二女の子宝に恵まれたのに、今はわずかに長男、喜寛ひとりになってしまった（喜寛はやはりセント・トーマス病院医学校を卒業後、慈恵医学専門学校の外科教授になっていた）。

この精神的打撃はまことに大きく、兼寛はすっかり生きる気力を失い、うつ病の状態になってしまった。しかも持病のリウマチを悪化させて、彼はもう誰とも面会せず、言葉を発することも無く、ただただ終日籐椅子にぼんやり坐っているばかりであった（あの激しく寸暇を惜しんで動き回ったかつての面影はもうどこにもなかった）。

彼は誰にも見舞いを謝絶していたが、宗教（神道・禊の行）の師、川面凡児だけには面会した。川面が訪ねたとき、兼寛は足の痛みのため乳母車にもたれながら庭先にでてきたが、その顔に表情はなく、薄く開いた眼に光はなかった。そして川面の手をとって「高木はもう駄目だ」と云って号泣したという。

しかしすこし小康がおとずれ、わずかに意欲があらわれたとき、川面にこうも云ったという。「神は宇宙を貫く光であると思う。これからは、この光に随順して、何とかもう一度国のために尽くしたい」と。しかし兼寛のこの望みはけっきょく叶えられることはなかった。翌大正9年(1920)4月12日、脳溢血症状をあらわし、ついに翌13日逝去した。享年72歳であった。